強制操作

ーティファ編ー

スマホで命令したことが現実に

ここは酒場セブンスヘブン―。
男がいつもこの酒場を訪れることには理由があった。
言うまでもなく、看板娘であるティファが目当てだった。
整った顔立ち長い髪、それに男好きのする体型―。
《いつかモノにしてやりたい……》

安酒をあおりながら
立ち働くティファの体を視姦することが
男の日々の楽しみだった。
直接手を出すことはとてもできない。
ティファが美しいだけでなく
格闘にも長けていることは男も知っていた。

だが、ある日――男は偶然、
写真を撮った相手を
操ることができる
スマホを手に入れた。

何度か実験してスマホの力が
本物であることを確認した男は
ついにティファにも
魔の手を伸ばす―。

「いらっしゃいませ～！」
ティファの明るく元気な接客の声が店内に響く。
男は改めてティファの体を視姦し、ごくりと生唾を飲み込んだ。
もうすぐこの極上の体が手に入る――。
そんなたぎった妄想を胸にしながら、
こっそりとスマホでティファを撮影した。

そして男は最後の実験として、
ティファが指の力を込められなくなるようにスマホを操作した。

――ガシャン！

「あ……、し、失礼しました！」
ティファが手に持っていたグラスが床に落ちて割れ、
男はスマホの効力を確信した……。

後日、男はティファを廃墟へと呼び出した。

「こんなところに呼び出して何の用？」

酒場の裏の顔、アバランチについて知られたのではないか――。

そんな疑念を持っていたからこそティファは男の呼び出しを断れなかった。

だが、それは男にとっては関係のない話。

男はただティファの体を好きにできればそれでよかった。

「オレはあんたの体を操作できるんだ」

（うそ……！　力が入らない！）
男の言葉が事実であることはティファにもすぐに理解できた。
体に全く力が入らず、自由に動かすことができない。
「くう……！」
どれだけ力をこめても結果は変わらなかった。
全身が痺れてしまったように弛緩し、
中途半端な姿勢のまま、
なんとか立っているのが精一杯だった。
……!!
「ククッ……これでご自慢の格闘もできないな」
「どういうつもりなの！？」
「あんたとしてみたいことがあってね……」

「例えばこういうのはどうだ？」
男はスマホを操り、モニター越しにティファの体を指でつついた。
「！？　な、なに、これ……！」
「オレがあんたの体をさわってやってるんだよ」
「く、あ……！　う……、ああ……！」
男はスマホをいじり、好き放題にティファの体をつつく。
んぅ…
びくっ♡
……ッ♡
びくっ♡
「やめなさい。こんな……！　あ、く……！」
「手も足もでない相手の体を
好きにするのはずいぶんと気分がいいものだな」
「はぁ、はぁ、あ……あ、んん……！」
スマホ越しに触っているうちに、
やがてティファの声に甘いものが混じり始める。

「クク……あんた、まさか感じてるのか？」
「そ、そんなわけないでしょ！？　早くこんなマネはやめなさい！　さもないと――」
「さもないとどうなるんだろうなぁ？
くだらないゴタクはやめてもらおうか」
男はスマホを操作し、ティファの胸の感度を上げた。
「あ、ん……！　な、なに……！？　胸があつい……！」
「口答えされるのは嫌いでね。立場をわからせるためにあんたの胸の感度をあげたんだよ」
「な……、そんなことまで……！」
「胸だけでイかせてやる」
クッ…
びくん
びくん

ティファの体を動けないように固定したまま、男はその豊かな胸に手を伸ばした。
「はぁ、あぁぁ……、くぅ……！」
男が無造作に胸を揉んでいるだけでティファの体には電流のような快楽が走る。
「や、やめなさぃ……ん！　ぁ、はぁ、ぁぁぁ……！」
「あんたこそ無駄な抵抗をやめたらどうだ？　従順になってくれればオレもひどいことはしないさ」
「誰があなたなんかに……！」
「じゃあ仕方ないな。胸だけでみっともなくイけ」
「！？　ぁ、はぁ、ん……ぁぁ、ぁ……！」
ビくっ
もみ
もみ
もみ
男はしばらくの間、容赦なくティファの胸を揉み続けた。
ティファの反応を見ながらスマホで更に胸の感度を上げ、強制的に絶頂させる。
「うぁ、はぁ、いや……はぁ、こんな……、ん、ぁぁ、ぁぁぁぁ……！！」
男の思惑通り、ティファは胸だけでイかされてしまう。

強制的な絶頂の余韻で
ぐったりとしているティファを連れ、
男は自宅へと戻った。
この日のために用意しておいた拘束台の上に
ティファの体を横たえて抵抗できないように固定する。
ティファが気がついたときにはもう、
物理的にも動けなくされてしまっていた。
「離しなさい、この卑怯者……！」
「フン……まだ口答えをする気か」
だがまだ抵抗する気力は失っていないティファに、
男の嗜虐心が疼いた。

ぶるるっ
ぶるるっ
ぶるるっ

「今度は直接当ててやろう」
男はティファのタンクトップをまくりあげ、
豊かな胸を露出させた。
「これが夢にまで見たティファの巨乳か。
形も色も綺麗でオレの理想にぴったりだ」
男は自分勝手なことを口走りながら
ペン型の器具で再びティファの胸を刺激する。
「あ……！　く、ぁあ……！」
「おっと、そういえば胸の感度を上げたままだったな。
まあ一生そのままでも困らないだろう」
「な、何を言って――く、ぁ……！　人の体をもてあそぶなんて……！」
男のいいように扱われ、ティファの目が怒りに燃える。
だが体が感じてしまうことは止められなかった。
つん
つん

「そろそろ乳首にもバイブ味わわせてやるか」
「!? ぁ、ぁぁ、ぁぁぁぁぁ……!」
今までは胸の周囲への刺激ばかりだっただけに、
乳首に振動を当てられる感覚は強烈だった。
「やめなさい……! ぁ、それ、止めて――
く、ぁぁ、ぁぁぁぁ……!」
全身がびくびくと跳ねてしまうのを
止めることができないまま、
ティファは男の前でみっともなく悶えてしまう。
「いい調子だな。このままたイかせてやる」
「いや! いやぁ……! ふぁ、ぁぁ、ん……、ぁぁ……!」
「我慢しても無駄だ」
男はねっとりとした手つきでティファの乳首を刺激し続ける。
「く……ぁぁ、ぁぁぁぁぁ……!」
ティファはまた絶頂を迎えさせられてしまった。
びくっ♡
びくっ♡
ぷしゅっ♡

ティファは激しい絶頂からやっと正気に戻ったとき、気がつけば複数の男に囲まれていた。
「これからオレたち全員であんたの体をいたぶってやるよ」
「……！」
男が雇った数人の助手も同じ形のバイブを手に持ち、ティファの肌に撫で付ける。
「いや、やめ……！　あ、ああ……！」
「毎日これを続ければ全身で感じるようになるかもしれないな？」
楽しげに笑いながら男たちはバイブでティファの全身をくまなく刺激していく。
「はぁ、う、はぁ、ん……！　ああ、はぁ、あう……！」
いくら我慢しようとしても無駄だった。
何度か絶頂を迎えさせられたティファの体は、もう全身で感じてしまうようになっていた。
あ
びくっ
びくっ
びくっ
スリスリ

男たちによって股を開かされる。
「離して……！　やめ……く、ああ……！」
そして男の一人がティファの股間にバイブをあてがった。
「んぁ、ああ、ああぁぁぁぁ！！」
すでに十分に高ぶっていたティファは、
クリトリスに与えられた刺激に
あられもない声をあげてしまう。
びくっ♡
ん♡
ん♡
「クク……まだイかないよな？　これくらい我慢できるよな？」
「……っ、はぁ、く……！」
男の挑発と強制的に与えられる快感になんとか耐えるティファだったが――。
「そうこなくちゃなぁ……」
その抵抗する強い意志はかえって男を喜ばせるだけだった。
「機械でイかせてもつまらんからな。ここはやはりオレの手でイかせてやるよ」
びくっ♡

男は無遠慮にティファの股間に指を伸ばした。
『!? あ、う、あ――あああああぁ!』
『オレの指を簡単に飲み込んだな。体は欲しがってるみたいだぜ』
『やめ――あ、はぁ、あああぁ……!』
男の指がティファの膣内にずっぽりと埋まっている。
『いい締め付けだ』
『く……うう……!』
自分の体内に異物が挿入されているおぞましい感覚。
だが――その感覚はティファに圧倒的な快楽ももたらした。
男はティファの膣内で指を軽く曲げ、襞をこすりあげる。
『あぁ、あぁぁ? だめ、そんな、あぁ……! しないで……!』
男がニヤニヤと笑いながら指を軽く動かし続けると――。
『くッ……! あ、あぁぁ、あぁぁぁぁぁぁぁ……!!』
ティファはついに膣内への刺激で達してしまった。
びくっ♡びくっ♡
ヒクヒク
ヒクヒク
ヒクヒク
ヒクヒク

「さて、そろそろ本番といくか」
『……！』
男はティファにあられもないポーズをとらせ、ペニスを露出させた。
『いや……、それだけは……！』
なんとか抵抗しようとするティファだが、
何度もイかされた肉体はもう限界だった。
脚を閉じることすらできず、男がペニスの先端を
あてがってくるのをただ見ているだけになってしまう。
ギシッ
ギシッ
ヤッ！
「ずっとモノにしたかった女を
ついに犯せると思うとたまらないな……！」
『あ、あああぁ……！』
ぬる♡

ついに男のペニスがティファの膣内に入っていく。
「だめ……、あ、う……あああ……っ」
まだイッたばかりで敏感な膣襞の感触に男は酔い痴れる。
「ついにあのティファに……ククク……！」
びくっ♡
びくっ♡
欲望が満たされるのを感じつつ男はゆっくりと腰を振り始めた。
「はぁ、ああ、あ……！」
ティファの体温と、鍛えた肉体ゆえの締まりの良さを堪能する。
男はすぐに我慢できなくなって激しいピストンを開始した。
ズブッ

「あっ、はぁ、ああ、んぁ！
ああ！　く、ん……！」
ティファの嬌声が室内に鳴り響く。
（こんなヤツに犯されてるのに……！）
何もできないまま感じてしまう無力感が
ティファを襲う。
（また……またイかされる……っ）
ティファがどれだけ耐えようとしても、
快楽だけは止まってくれない。
「あ、ああ、ん――
ああああああああ！！」
十分すぎるほど濡れた膣内は
男の身勝手な欲望にも反応し、
再び絶頂させられてしまっていた。
「く……ぅう、はぁ、はぁ、はぁ……っ」
息をなんとか整えて耐えようとする
ティファに男が言う。
「気持ちいいんだろ？」
「……っ」
「気持ちいいと言え。オレに犯されて
ヨガってることを認めろよ」
ティファは男のセリフには答えず、
睨み返した。
心は屈していないことを示すのが
ティファの精一杯の抵抗だった。

「フン……認めれば楽になるのにな」
男は多少気分を害しながらもニヤニヤと笑みを浮かべ、バイブを再び手にする。
「こうやって犯されながらバイブも使われたら……どうなるかな？」
「……！」
男がなぶるようにピストンしながらバイブをクリトリスにあてがう。
「く……ああ、はっ、あぁ……！」
「いい反応だな。さあ、認めろよ。気持ちよくなってるってな」
男は笑い、腰をグラインドさせてティファの膣襞を荒らしていく。
だが、ティファは嬌声を上げはするが、決して男を認めるようなことは言わなかった。
「これでも気持ちイイのを認めないのかい？」
「こんなのッ！全然…ッ！んんん！」
「仕方ない……。じゃあ罰として中に出してやる」
中に出されてしまう――女としての本能的な恐怖が胸に迫るが、それでもティファは男の思う通りに振る舞うことはなかった。
「はぁ、あ……く、うう、あぁぁ……！」
「そら、イくぞ……！」
「あ、う、あぁぁぁぁぁ……！」
連続する絶頂を味わわされながら、子宮に男の白濁を叩き込まれる……。
ビュルッ
ビュルッ

ドク、

気が付くと、ティファは別の場所に連れてこられていた。
「ここは……」
体にはまだ男に犯された不快な感覚が残っていた。
力もほとんど入らない。
どうやらまだティファの体は男の支配下にあるようだった。

だが――。
「え……？」
突然、目の前にクラウドの姿が現れる。
「く、クラウド！？」

「助けにきてくれたの!?」
クラウドは優しげな笑みを浮かべている。
そして無言のまま歩み寄り、
ティファの体を抱きしめた。
「あ……。ご、ごめんあさい。
今、体を操られてて……力が入らないの」
「……」
「せっかく助けにきてくれたのに、
これじゃ足手まとい――」
ティファが言いかけたとき、
クラウドの手がティファの胸をもみしだいた。
「ん……! な、何!? クラウド――」
ティファが違和感を抱いた瞬間、
クラウドはティファの背中にまわりその体を拘束した。

（違う…！　これはクラウドじゃない！　これはニセモノ！）
やっと確信を得たティファだったが、もう遅かった。
偽のクラウドはティファの体を羽交い締めにし、胸をもみしだきながら股間にも手を伸ばしてくる。
「やめ……、離しなさい、このニセモノ……！」
強気な口調で言うティファだったが、その抵抗は弱かった。
（こんなことしてる場合じゃないのに……！）
んぢっ…
ぢっ♡
びくっ♡
びくっ♡
手を払いのけようと思っても、どうしても本気で抵抗することができない。
（クラウドの姿でされると感じちゃう…！）
「く、クラウド……！　あ、ん、あぁぁぁぁ……！」
偽物だとわかっていても、声を聞いた瞬間にまた一瞬勘違いしてしまう。
ティファは偽のクラウドの指によって簡単にイかされた。
ぢゅぢゅぢゅ♡

（だめ……！　これは偽物……！　偽物なのよ！）
どれだけクラウドにそっくりに見えてもそれは幻だ。
頭ではわかっていてもやはり本気で抵抗することができなかった。

（抵抗して……こんな幻からは目覚めなきゃいけないのに……っ）
心はどうしてもクラウドの姿に反応してしまい、
気力を弱めてしまう。

「あ、だめ……そこは……！」
偽のクラウドはそれをいいことに
ティファの下着をずらし、
いきなりペニスをスリットにあてがった。

「だめ……やめて、だめ……っ」
そこまでされてもティファはまともに抵抗できず――
むしろ心のどこかでは喜んでしまっていた。

くちゅ

「あ――あぁぁぁぁぁ！」
ティファの反応が弱いのをいいことに、
偽クラウドはバックから一気にティファの膣内に挿入した。
（入ってきてる……、また犯されてる……っ）
悔やむティファだったがもう遅い。
びくっ♡
びくっ♡
びくっ♡
あッ……♡
ズッ♡ズッ♡ズッ♡

そして挿入されると同時にティファにかかっていた幻覚が解けた。
『……ッ！』
偽のクラウドの姿が、みるみるうちにスマホ男のものになる。
『どうだ？　気持ちよかっただろう？』
『く……ぁぁ、ぁぁぁ……』
『もう言い訳できないだろう？』
『ひどい……、っ、はぁ、ぁぁぁぁ……！』
クラウドの姿を利用された怒りよりも、幻にすがってしまった自分の弱さがティファにはショックだった。

ドキッ

心は乱れ、男に抵抗する気力も急速に消えていく。
『ク……いい具合になってきたな』
『っ、ぁぁ……、はぁ、っ……ぁぁ……』

……!?

意志の力を失ったティファはもう男の思うがままだった。
『いや、あ……はぁ、やめて……』
男にがっちりと押さえつけられながら犯され、
体を動かすこともできない。
ビクッ♡
ビクッ♡
ビクッ♡
「ククク……クラウド相手にたっぷり濡れた分、
オレが使わせてもらおう」
（クラウドが来るわけないのに……、わたしは……っ）
幻にすがってしまったことで、
ティファはクラウドを裏切ってしまったような気分だった。
自分に失望し、押し寄せる快楽に流されていく――。
ゲチ
ゲチ
ゲチ

『あぁぁ、はぁ、あ――、あぁぁぁ！』
「ほら、イけよ。クラウドに謝りながら、オレに中出しされてイけ」
『いや……ぁぁ、く、うぅ……っ』
道理の通らない男のセリフだが、今のティファには効果絶大だった。
膣奥を集中的に突かれ、急速に体が高ぶっていく――。
びくっ♡ びくっ♡
『あ……ごめん……ごめん、クラウド……っ』
「そうだ……。ククク……！ オレも出すぞ！」
『ふぁ、ぁぁ、ぁぁぁ――
いく、イ……はぁ、イク、イク……！』
男のペニスがティファの膣内の二番奥で膨らむ。
『イクッ……！ あ、ぁぁぁぁぁぁ！』
ビュプ、ドビュ、ビュルル――！
熱い精液がティファの子宮内で迸り、粘って大量に張り付く。
びくっ♡
『く……うぅ、はぁ、はぁ……ぁぁ……。クラウド……』
ティファの心も体も男の精液を受け入れてしまっていた……。
ビュルッ
ビュルッ

ティファは体を操られ続け、男に弄ばれるままになっていた。
『あ……イク、また……イク……！』
『そうだ……。だいぶ素直になったな』
ティファの胸の感度は上げられたままな上に、何度も犯されるうちに体のほうが快楽を求めるようになっていた。
今は乳首をひねられただけで簡単に絶頂する、男に都合の良い人形のような状態だった。
『ほら、これだけで……またイクんだろ？』
『あ――ああ、うう……ああぁぁぁぁぁ！』
『ハハハ、いい締め付けだ！』
男に犯され、腰を振られる。
飽きられてしまうまで、ティファは男に支配されたまま――。
ただ快楽に流されてしまうだけの日々を送るしかなかった。
びくっ♡
びくっ♡
ビュルッ
ビュルッ

今回の作品は
人気コスプレイヤー「桃色れく」さんとの
コラボ作品として製作しました。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

クリムゾンHP

http://www.alles.or.jp/~uir/

どこよりも早い新刊情報。
詳細見本も掲載中。
ダウンロード販売案内・本、ゲームの通信販売案内。
最も危険なWEBマンガ「蒼い世界の中心で」週刊連載中。
HP上ではアンケートも行っています。ご協力おねがいします。
ツイッターもやっています。
最新情報・作業情報など確認できます。
インタラクティブHバトル同人ソフト　各種　ダウンロードできます。
同人ソフト攻略ページも開設。
格付けしあう女たち　ジャンプキャラクターVer。
さまざまなランキング
(ゲーム史を代表する悪役キャラクター、好きな女性有名人、
一番友達にしたいジャンプキャラクター　など)
ケータイコミック情報

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

セグアVSニンテルド！
コンシューム大陸の占有率をめぐる
ハードな戦争！

蒼い世界の中心で 完全版

あおいせかいのちゅうしんで

コスプレイヤー桃色れくさんの
【桃色れく強制操作 -ティファ編 -】写真集
【桃色れく強制操作 -ティファ編 -】ROM
もよろしくおねがいします。
今回のこの本と同じシチュエーションの
美麗なティファの写真が満載です!

クリムゾン×桃色れく
コラボ特設サイトはこちら
http://momoreku.net/tifa/

強制操作　ティファ編

2016年　8月13日発行

発行　クリムゾン
印刷　大陽出版

http://www.alles.or.jp/~uir
twitter　@crimson_3

強く気高いティファが意のままに操られる！

女の体を自由に操ることができる
スマホを持った男に狙われたティファは
力を封じられ、怪しい実験室でカラダを開発され、
幻覚を見せられてココロも犯される…！